

<総括>

出題数	現代文 1題・古文 1題	試験時間	75 分
-----	--------------	------	------

「歌」の観点から「ヒト」とその他の動物を比較しつつ、人間の特質について論じた評論文からの出題。フランスの言語学者エミール・ヴァンヴェニストやロシアの文芸学者ミハイル・バフチンなどを援用しつつ、人間の言語によってしか表現できない「私 (一人称)」と、対話の相手である「あなた (二人称)」との反転可能な関係性や、そこから断絶した三人称に注目し、言語の意味内容が「私」のみでは確定できないこと、さらに目に見えない他者の心や、現象の背後に潜む意図を知りたいという欲望に付き纏われていることを人間の特質として取り上げている。

問十四の選択肢の読み取りはやや難解であったかもしれないが、その他の設問については、しっかりと読解の練習を積んでいる受験生には対応可能であったと考えられる。

新課程を踏まえた出題

問九の設問は、現代文の知識のみならず、古典(和歌)の理解をも求めるところがあり、部分的にせよ現古を横断するような要素が認められる。選択肢の判断自体は、平安時代や太平洋戦争に関連する体制の背景知識があればより容易だが、設問の目新しさそのものに戸惑った受験生もいたかもしれない。

<本文分析>

大問番号	一
出典 (作者)	「言語の起源、歌の起源」(田崎 英明)
分量 前年比較	分量(減少・やや減少・ 変化なし ・やや増加・増加) 約4000字(前年約4200字)
難易 前年比較	難易(易化・やや易化・ 変化なし ・やや難化・難化)

<大問分析>

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)
一	評論	問一	マーク式	標準	漢字 書き取り (4題「随意」「括られ」「留保」「遮蔽」) 漢字 読み取り (2題「騙して」「纏われて」) 脱落した一文を問題文に挿入する問題 ※ 挿入する部分の直後(第九段落)から、脱落文の内容「歌と言語の差異」に関わる展開が始まる。 語句の意味を選ぶ問題 (「相俟って」) 傍線部の理由を説明する問題 ※適当でないもの 語句を空欄に補充する問題 (「牧歌的」) ※空欄直前の文脈「～みんなで歌を歌っていた光景～微笑ましくなる」を踏まえて「牧歌的」を選ぶ。 語句を空欄に補充する問題 (「火事場」) 文学史の問題 (「開高健」) 太平洋戦争および古典 (和歌) に関連した問題 語句を空欄に補充する問題 (「親和性」) ※空欄直前の文脈「多くの兵士たちが音楽の力を借りて戦闘へ～」を踏まえて「親和性」を選ぶ。 語句を空欄に補充する問題 (「ダイアログ」) ※空欄直前と直後の文脈から「モノログ」との対比を踏まえて「ダイアログ」を選ぶ。 傍線部の内容を説明する問題 傍線部を踏まえて合致する具体例を選ぶ問題 傍線部の内容を説明する問題 (二つ) 問題文の内容と合致するものを選ぶ問題 (二つ)
		問二	マーク式	標準	
		問三	マーク式	標準	
		問四	マーク式	標準	
		問五	マーク式	標準	
		問六	マーク式	標準	
		問七	マーク式	標準	
		問八	マーク式	標準	
		問九	マーク式	標準	
		問十	マーク式	標準	
		問十一	マーク式	標準	
		問十二	マーク式	標準	
		問十三	マーク式	標準	
		問十四	マーク式	やや難	
		問十五	マーク式	標準	

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

- ・ 文脈を的確にたどりながら、本文の論旨を正確に把握できる堅実な読解力を養っておくこと。
- ・ 設問対策としては、本文の内容に基づいて正解と誤答を見きわめる選択肢問題の練習を十分に積み重ねておきたい。
- ・ 関西学院大学の入学試験においては、出題数の多い漢字問題や語彙問題で点数を取りこぼさないように、まめに辞書を引いて言葉についての基礎的な知識を養っておくことがきわめて重要となる。今回のように文学史の出題もあり得るので、そうした知識も併せて養っておきたい。

国語(現代文・古文) 関西学院大学 全学部日程 (2/1実施) 3/5

<総括>

出題数	現代文 1題・古文 1題	試験時間	75分
-----	--------------	------	-----

本文は、平安時代の作り物語である『狭衣物語』からの出題であった。受験生にとって馴染みのあるジャンルからの出題であるが、本文の展開を丹念に追う必要があった。設問は基本的な学習を基軸とした文脈上の理解を要求するものから構成されており、受験生にとって学習の成果を測定しやすい問題であった。昨年度と同様にことわざの語意を問う設問は用意されていなかった。本文の分量は前年より減少、総設問数は2問増加(前年度は13問)であり、出題の形式は例年通りであった。全体的には本学古文の典型的な出題形式、すなわち、「基本的な知識と読解力を試す」点を踏襲している。

<本文分析>

大問番号	二
出典 (作者)	『狭衣物語』巻 (六条斎院祓子内親王宣旨か)
頻出度合 ・的中等	頻出
分量 前年比較	分量 減少 ・やや減少・変化なし・やや増加・増加) 約900字(前年約1340字)
難易 前年比較	難易(易化・やや易化・ 変化なし ・やや難化・難化)

<大問分析>

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)
二	作り物語	問一	マーク式	標準	設問。「側の物見」を問う。傍線部直後の「少し開きたるより、円頭見ゆる」を踏まえる。
		問二	マーク式	標準	解釈。「この御車を見るなるべし」を問う。「この御車」が何を指すのか、「べし」の訳出に着目する。
		問三	マーク式	標準	語意。「ひが目」「わななき」「いで、さは」「法師だてら」を問う。「いで、さは」「法師だてら」は文脈上で判断する。
		問四	マーク式	標準	解釈。「供なる童の持たる物やしるからん」を問う。「持たる物」の具体化、「しるから」が形容詞「しるし」の未然形であることに着目する。
		問五	マーク式	標準	現代語訳。「え逃げで引き留められぬ」を問う。陳述の副詞「え」の訳出、「られ」が受身の助動詞であることに着目する。
		問六	マーク式	やや易	読み付け。「咎め」「阿闍梨」を問う。
		問七	マーク式	標準	解釈。「誰ばかりにかおはすらん」を問う。随身の「咎め」た発言全体に留意した上で、「誰ばかり」の訳出、「おはす」に着目する。
		問八	マーク式	標準	空欄補充。空欄部直後の「心にまかせず走りはべるを」を踏まえて、童の弁明であることに着目する。
		問九	マーク式	やや難	説明。「この尼君はなど逃ぐるぞ」に込められた随身の気持ちを問う。傍線部直前の「降り走りて、顔を隠して逃ぐる」法師に向かったの発言であることに着目する。
		問十	マーク式	標準	文法的説明。「かくなせそ」「侍りつるなめり」の品詞分解を問う。
		問十一	マーク式	標準	説明。「年頃の思ひ」が誰のどのような思いかを問う。童の発言中で「急ぎたまふ」の主体、「年頃、懸想したまへる」に着目する。
		問十二	マーク式	標準	主体判定。「僧のあたりにて年頃ありつるしるしには聞き知りさぶらひて」の主体を問う。傍線部が童の発言中であること、直後に「のたまふままに走らせはべりつるなり」とあることに着目する。
		問十三	マーク式	標準	空欄補充。副詞「さらさらに」は「さらに」の強調表現であり、下に打消の語を伴うことに着目する。
		問十四	マーク式	標準	説明。「何しにかは、かかるわざをばしつる」における狭衣の心情を問う。傍線部を含む発言が、随身の報告に対するものであり、「かは」は反語表現であることに着目する。
		問十五	マーク式	やや易	文学史。『狭衣物語』と同じ平安時代に成立した作品を問う。

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

- ・古語と古典文法を押さえたうえで、主体や客体の補充、指示内容の特定などを適宜行いながら、文脈を把握する練習を積むこと。過去問などの演習を通じて養成するとよい。
- ・いろいろなジャンルの文章を読み慣れて、細部の知識にばかりとらわれず、全体的なストーリー展開や作者の評言などを理解したうえで、内容をまとめる練習を積むこと。
- ・古典常識や文学史などについてもしっかり学習しておくこと。
- ・和歌に関しては、和歌が詠まれた状況を読み取ったうえで、修辞の学習も含め、一首全体の解釈などの練習もしておきたい。